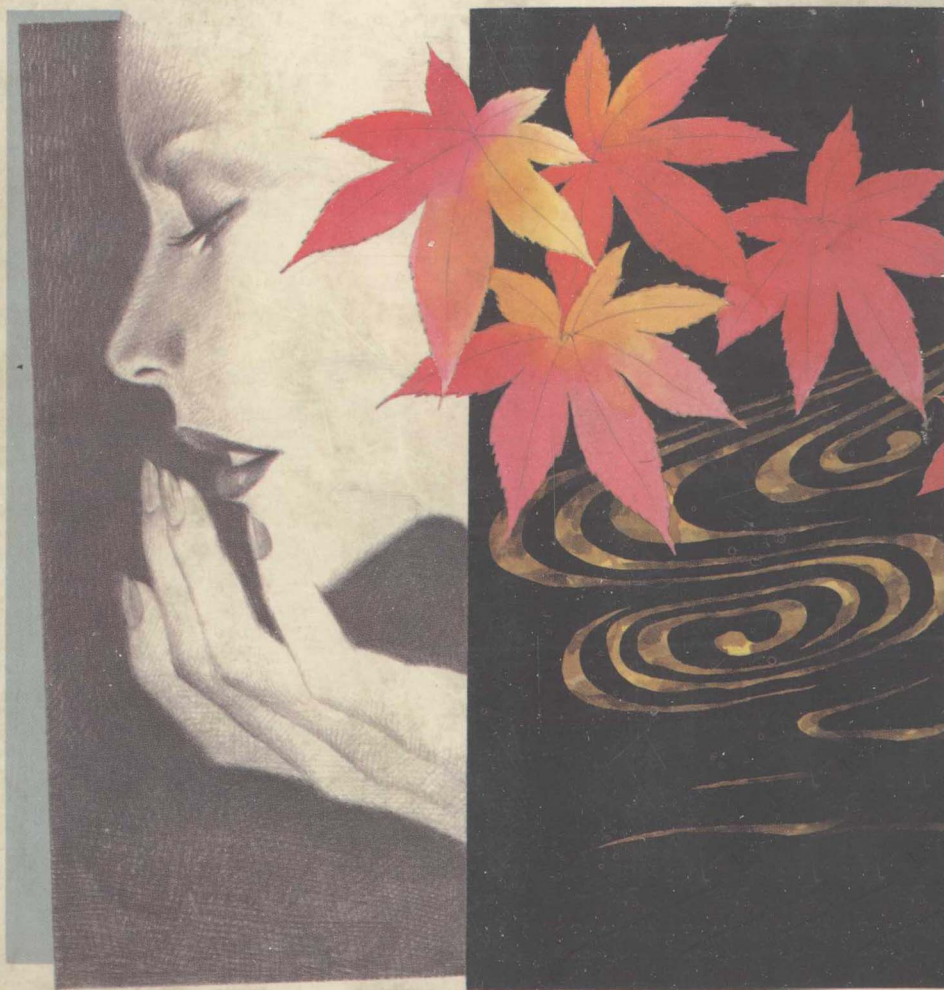


秘められた心中

夏樹静子



れた心中

夏樹静子



文藝春秋

秘められた心中

昭和五十九年六月三十日 第一刷

定価 九〇〇円

著者 夏樹静子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 (〇三) 二六五・一二一一

印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

秘められた心中／目次

秘められた心中

残された車

遠い秘密

説得旅行

女たちの証言

濁流の魚

201 163 119 91 69 5

A 装帧
D

花 新井
村

広 亮

秘められた心中

秘められた心中

午後零時二十九分のひかりで、木谷^{きたに}温子は京都へ着いた。名古屋では雲のかかっていた空が氣持よく晴れている代り、フォームの風はひとときわ肌に染みて冷たい。

南口へ出て、タクシーに乗った。

「勸修寺へ。できれば、滑石越えの裏道を通っていただきたいんですけど」

個人タクシーの運転手が、バックミラーで温子をすかし見ながら、

「奥さん、お詳しいんですね」

「いえ、それほどでも……」

名古屋に住んでいる温子は、とくべつ京都に明るいわけでもないのだが、どちらかといえば観光客の多い洛南のほうが好きで、わけても偶々^{ふふ}ちょうど一年前の秋、峯夫に案内してもらった勸修寺と、その時通った裏街道の風情が、忘れがたいほど心に刻まれていた。

車はいったん七条通りへ出てから、三十三間堂の前を右折して、記憶にあるままの物寂しい山道へかかっていく。黄や褐色に色づいた雑木林や、深い竹林が繁り、ところどころで漆が目のさめるような朱に染まっている。

車二台がやっとすれちがえる程度の、曲りくねった坂道に沿っては、細かな格子のはまった古びた家々ばかりだが、この辺には焼きものの窯場も点々とあると聞いたことも憶えている。ほの暗い木立のあちこちから、狭い間道が岐れ出て、どこからか白い煙が漂い、暖かそうな陽光が斜めにさしかけている。

「滑石街道」と呼ばれるそんな山深い感じの道をしばらくのぼって、やがて谷間に家々の集落がひらけると、そこが山科だった。

息をこらして窓の外を見守っていた温子は、道が下りにかかると、ほんと小さな吐息をついた。今通ってきた道、目に触れた風景の一つ一つに、もう一度引き返したいような執着を覚えた。

大石神社前をすぎ、名神高速のガードをくぐると、勸修寺である。白壁の塙の間を抜けたところで、車が停った。温子は料金より多めに払い、「ありがとう」と札をいって降りた。いっちょの行動を、ていねいにおこうとするような、奇妙な心理に支配されている。

ほどなく一時になると思い、腕時計から顔をあげた時、人影を感じた。振り返ると、背の高い痩せ型の身体に濃紺の背広を着た峯夫が、寺の門をくぐってくるところだった。

「やあ、お待たせ」

峯夫は肉薄の丸顔に笑みを浮かべて歩み寄ってきた。温子より二つ年下の彼はもう三十二歳になるはずだが、笑うといつまでも童顔に見えるのは、子供の頃から彼を知っているせいかもしれない。

「いいえ、私も今来たばかり」

「今日の着物、似合いますね。ぼくにはよくはわからないけど」

黒の大島の上に、うす紫の小紋の道行きコートを着た温子を、峯夫はちょっと眩しそうに眺め

た。重電機メーカーの技術者である彼が、温子の衣服をほめたことなどはついぞなかったから、今日はよほど最初の印象が強かったのだろう。それもまた、何か運命的なことにように、温子の胸にしみた。

「土曜日は出にくかったんじゃないの」

「いやあ、佐知子もどうせ出掛けてるから」

「由紀ちゃんは？」

「お袋さんとここに預けてるよ」

「じゃあ、今日はゆっくりできるのね」

彼は温子の視線を受けとめて頷いた。

「入ろうか」

「ええ」

彼が拝観料を払って、二人は勸修寺の庭へ足を踏み入れた。醍醐天皇が創建されて以来千余年たつ格式の高い真言宗の門跡寺だが、とくに氷室の池をめぐる回遊式の庭園で知られている。

今はまた、紅葉の真っ盛りだった。たくさんのもみじが赤や黄に深く染まり、ひととき高い銀杏も鮮やかな黄葉をつけている。庭園の前方にはなだらかな緑の山が横たわって、もともと周囲の借景をとりこんで造園されたというだけに、その自然の対照、配色の美しさは、とてもことばには表わせそうもなかった。

「今日はお天気も良かったからなあ」

しばらくは目を奪われていた峯夫が、嘆息混りにいう。

「それにこの辺は、土日でも割合いい人が混まないのがいいね」

「ほんと。こんな日に来られて、幸せだったわ」

植込みの間の砂利敷きを踏んで、ゆっくりと足を運ぶと、枯芝の奥庭へ出た。その先にあるのが氷室の池で、京都屈指の古池に数えられている。

芝生の上には明澄な秋の陽がふり注ぎ、静かに散歩したり、寝そべって陽を浴びている若いカップルなども見られた。

二人はそこを横切って、池畔へ歩み寄った。青緑に淀む池は、いちめんに蓮や睡蓮に被われていたが、それも枯葉の色を帯びて、季節の深まりを感じさせる。池に浮かぶ中の島には、松、樅、山桃などの老木が、荒れはてた感じで繁るにまかせてある。池の主の白色の大蛇が棲むという伝説のために、人手を加えずにそれを祀^{まつ}ってあるからだ、と、立て札に記されている。古池と中の島と、対岸の山だけを眺めていると、何百年も昔と同じ景色が、そのままそこにあるようだった。

島の木立の間を、灰色の大きな鳥がふんわりと飛んだ。

「五位驚^{おどろ}だな」

峯夫が呟いて、二人はまたしばらく無言で風景に見入っていた。二人とも決して饒舌ではないから、たまに逢っても黙っている時間のほうが長いくらいだったが、今日の温子には、その沈黙をかみしめていたい気持と、少しでも多くを語りあっておかなければといった焦りとが、胸のうちにせめぎあっている。

「お仕事のほうは、いかが？」

「まあ、相変らずだね。うちの機械は、現在民間の発電所で採用されてないから、当分仕事が急に忙しくなるということはないだろうな」

「でも、将来タイプの原子炉を設計しているんでしょ？」

「実験的にね。一応政府から、設計図の発注はきているからね」

「じゃあ、それが発電所に導入されれば、脚光を浴びるわけかしら」

「まあね。しかし、いつのことかわからないけど」

峯夫はうすい唇から皓い歯を覗かせて苦笑した。

大阪の国立大学の大学院を卒業した東田峯夫は、業界では中堅といわれる重電機メーカーに就職して、原子炉設計部に所属している。勤め先は神戸にあり、西宮の社宅から通勤していた。

「佐知子さんもお元氣みたいね。デザインのお仕事、続けてらっしゃるんでしょ？」

「あっちは張り切ってるよ。家庭より外で働くほうが向いてるみたいだな」

「お母さまが近くにいらして、子供さんを看てくださるんだから、恵まれてらっしゃるのよ」

「由紀子をまん中にして、三人で喋ってるの聞いていると、なんとなく女系家族って感じてね。ぼくなどは余計者みたいだ」

無論それは冗談めかしたい方だったが、彼が全体にちょっと活気を失って見えるのは、業界の状況から、彼の仕事の部門が陽の当たらない場所に追いこまれているせいにもちがなかった。

「それより、木谷さんはどう？ 身体はもうすっかりいいんでしょ？」

答える前に、温子は思わずまた、重い溜息をついていた。

「手術は成功しているし、術後半年以上たつわけだから、心配ないと思うんですけど、やっぱり本人はね、つい悪いほうへ想像しちゃうんじゃないかしら」

「まあ、あんまり仕事の無理はされないほうがいいだろうね」

「ええ……」

そのまま黙っている温子の横顔を、峯夫はいつとき見守っていたが、

「今日は、京都に用でもあったの？」

「いいえ、別に。なんとなく峯夫さんに逢いたくなったからよ」

西宮と名古屋に住んでいる二人は、今までにも中間の京都や大阪で落ち合うことはあったが、それは何かしら用事があったり、どちらかのついでを利用した場合で、今日のように、温子がわざわざ峯夫を呼び出したのははじめてだった。

「来てもらえて、うれしかったわ。それも、こんなに穏やかな、秋麗というのにふさわしいような日和に、真っ盛りのもみじを見られたなんて、私、ほんとにもう……」

と、ふいに暗い影が頭上に襲いかかるような気がして、温子は小さく叫んで身をすくめた。咄嗟に峯夫が温子の肩に手を廻した。五位鶯が羽をはたかせて、島からこちらへ飛び渡るところだった。

それだけのことで、温子にわかってからも、峯夫は手を緩めずに、彼女を支えたまま、少しの間じっとしていた。それから、息を吸いこんで、思いきったようにいった。

「温子さん、何かあるんじゃないの？ 今日是最初から感じてたんだ」

2

勸修寺を出た二人は、ちょうど来合わせたタクシーに乗って、牛尾山の麓に近い〈滝つ瀬〉へ向かった。

そこは音羽川の上流をとり入れた敷地の広い割烹旅館で、温子は何年前か前、夫の会社の取引先である西陣織の織元の接待を受けたことがある。今日、早目の夕食を予約しておいたのも彼女だ

った。

奈良街道を北へのぼり、国道一号線に出て、音羽山隧道を越えてから山間部へ入った先にそれはあった。

茶色い壁土の兜門かぶともんの前で車が停まると、法被はっぴを着た番頭風の人が出迎えて、二人を門内に請じた。そこから建物までがかなりの道のりで、跳び石伝いの下り坂に沿った庭は、植込みと苔に被われている。苔の上に真紅のもみじが散り落ち、西陽に照り映えているのがなんとも美しい。庭の下から、せせらぎの音が聞こえている。

通された座敷は、崖に張り出したような造りで、目の下に滝壺があった。

「ずうっと昔、私たちがまだ小学校の低学年の頃、伯父さんにこんなふうな料理屋さんへ連れていっていただいたことがあったわ。岐阜のほうだったと思うけど」

「ああ、憶えてるよ。親父が行く店だから、もちろんこんな高級なところじゃなかっただろうけど、やっぱり滝があったね」

紋甲イカの黄金焼き、焼き栗、ギンナンなどの箕みかご盛りや、一塩ぐじの蒸しものと、季節感のあふれる料理が運ばれた。日本酒を飲み始めると、温子はいく昔話を口にした。峯夫の父は、温子の母の兄で、つまり二人は従姉弟同士に当たるが、血は繋がっていないかった。

今年三十四歳と三十二歳になる温子と峯夫は、名古屋の西北にある稲沢市の生まれ。温子の生家は農家、峯夫の父は稲沢に多い植木職だった。といっても、峯夫は娘が二人いる家へ、赤ん坊の頃貰われてきた。

家も同じ町内にあって、齢が近いのと、互の父と母がとりわけ仲の良い兄妹だったので、二人もまるで姉弟のような気持で成長した。温子の家はもともと貧しい農家の上に、父親は酒呑みで

あまり働かず、フラリと町へ出ていつて何日も帰ってこないようなことも珍しくなかった。それで家の暮しが逼迫するたびに、峯夫の父に扶けてもらっていたらしい。

ところが、峯夫が中学三年の時、その父が仕事中の怪我がもとで急死してしまうと、どちらの家も窮乏に変わりなくなった。峯夫の母は畑仕事の傍ら、一宮の繊維工場へパートで働きに行った。温子は、高校卒業後、名古屋に就職した。自動車部品を扱うディーラーの経理課に勤めたが、役員の不正が原因で、間もなくその会社は潰れてしまった。

つぎの勤め先が見つかるまでの間、会社の先輩に紹介されて、栄にあるメンバーズクラブの経理を手伝うことになった。そこで木谷信吉と知り合った。

当時四十歳になったばかりの木谷は、名古屋では名の通った織物問屋「丸喜屋」の社長をつとめていた。父親から社長職を引き継いでまだ三年目だったが、新卒で入社以来、トイレの掃除までする平社員から叩きあげられたというだけに、苦勞知らずの二代目といったひ弱さは少しも感じられなかった。

温子を見初めた木谷は、三日にあげずクラブへ通ってきたが、三箇月もすると、昼間食事に誘うようになり、間もなく彼女に求婚した。当時彼は二年前に妻と死別して、両親と二歳の長男といっしょに暮していた。先妻は高齢初産だったためか、頸管裂傷がもとで、産後間もなく亡くなったそうである。

温子が木谷と結婚したのは、今からちょうど十五年前で、温子は十九歳、木谷は四十歳だった。その頃の峯夫はまだ稲沢の高校に通っていたが、やがて大阪の国立大学工学部へ進んだ。学資の半分はアルバイトで賄っていた。

彼が二年になった春、彼の母が腎臓を悪くして、寝たり起きたりの状態になってしまった。峯